

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成三十一年一月度 入選句（投稿総数三千百三十三句・一般投句数五百九十二句）

選者 名和 永山

特選

本籍は湖の底なりおでん酒

東京都世田谷区 関戸 信治

「本籍は湖の底」で読者は、「おや」と思うだろう。さてこの「湖」は、まさか琵琶湖ではないだろう。昭和三十年代から四十年代にかけて多くのダム工事行われ、故郷がダムに沈んだ人が多い。「湖の底」とは、「ダムの底」だが、「ダム」と言わなかったところにこの句のおもしろさがある。つまり「本籍」は「ダム」ではなくて、あくまでも「湖」なのである。

作者はなつかしいその頃の生活を思い起こされたのであろう。村の衆が集まり、「おでんに酒」で賑わった「本籍の地」でのなつかしさが読み手にも伝わってくる。

味噌樽の箍のささくれ年暮るる

大垣市 小林 研

味噌樽は、現在ではほとんど使われなくなってしまった。昔は「味噌部屋」といつて漬け物樽などが入った狭い場所に置かれていたことを思い出す。「箍のささくれ」とあることから昔から何年も使った味噌樽なのであろう。木製の樽だから、古くなるとささくれができるのである。季語の「年暮るる」の一年が終わるという時間の経過と樽が古くなってきたという現象を上手く言い表している。

何気ない生活の風景だが、題材のおもしろさがある句である。

舞ひ上がる枯葉そのまま風となり

岐阜市 花川 和久

俳句は理屈ではない。この句を読むと「舞ひ上がる枯葉」は、当然「風」で舞ひ上がったことがわかるが、詩的な考え方をすれば「実際に枯葉が舞っていた」現実を目で捉えた。その結果「風の仕業」であると気づく。そればかりか「枯葉」が風の一部になって舞っていると捉えたところにこの句の良さがある。「そのまま風となり」の措辞が風の吹き続けている情景としてとらえることができる。なぜなら「風となる」の終止形ではなく「かぜとなり」と連用にしたことの工夫も見られる。

秀逸

本堂の屋根より明くる初景色

大垣市 平野 きぬよ

柚子の香に鼻歌続く仕舞風呂

大垣市 高津 喜久子

御慶かな面輪のやさし六地藏

大垣市 尾関 逸子

平成の一打の余韻除夜の鐘

大垣市 宮脇 和子

風花や常盤御前の小さき墓

養老郡養老町 田中 紫香

薄氷の解けゆく終の光りかな

大垣市 日比野 友子

筆先の影も撥ねたり筆始

岐阜市 堀江 美州

新年会語る歌ふも昭和なる

大垣市 早崎 美弥子

観閲の口一文字出初式

大垣市 末守 節子

身の丈の暮らしにひたり根深汁

三重県四日市市 後藤 允孝

入選

忘れ物のあるよな老女大晦日	大垣市	安田	むつこ
書き初めや用紙はみ出す反抗期	東京都狛江市	椎野	一恵
夫よりも節節太く去年今年	大垣市	樋口	絹子
手離せぬ母愛用の冬帽子	安八郡安八町	棚橋	良子
冬晴の税凜々しく太田宿	不破郡垂井町	児玉	昌巳
お転婆の小さき膝や春着の子	大垣市	大槻	恭子
認知症の家族糸編む絆	大垣市	矢代	由美子
背伸びして並ぶ水仙海を向く	大垣市	松岡	みつ
初明り今ある命いただきて	大垣市	稲葉	妙宏
深雪空大旋回の鳶一羽	岐阜市	島	めぐみ

入選

群れてめくれて電線の初雀	大垣市	佐藤	すみ子
初景色璧くつきりと伊吹山	大垣市	森川	きよ子
一村をダムに沈めて山眠る	不破郡垂井町	富田	実郎
白伊吹茜に染まる初落暉	不破郡垂井町	西垣	和志
漆黒の闇から里へ初電車	大垣市	久保田	悟義
夫作る切干の幅不揃いに	大垣市	高石	政明
因数分解冬オリオンに似たりけり	三重県鈴鹿市	松井	政典
子のブルゾンまとう母の背雪明かり	東京都港区	上田	清恵
山門を大きく見せて冬紅葉	三重県津市	村山	好昭
湯婆抱き夢のつづきの甘さかな	大垣市	平野	ヒサエ

選者吟

寒椿白には白の意地のあり

永山